第430号 昭和56年4月20日発行（毎月20日発行）
昭和49年3月31日 第三種郵便物認可

1981年（昭和56年）
4月号（No. 430）
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150円

目　次

「中国登山委員会」とボゴダ山群登山計画（鹿野勝彦）……（1）
東海支部20周年記念日本＝ネパール国際親善隊派遣報告（下）……（1）
藤島さんの本・ほか（小野　幸）…（2）
松本信広氏の上高地スキー行……（4）
東西南北……（4）
雪のゲンコツ山
ダージリンの一夜
三水会だより
赤岳十句
図書紹介……（5）
「カラコルム探検史」「きのうの山きょうの山」「続・静かなる山」
お知らせ……（8）
山菜山行（集会委員会），出羽三山行（科学研究委員会），ヒマラヤの王国-ネパール展（東海支部），上高地山研開所，事務局より
委員会報告……（8）
会務報告・ルーム日誌・会員移動……（10）（11）
図書受入報告（図書委員会）……（11）
カット／芳野満彦・吉阪隆正・松本慎太郎

▶日本山岳会事務取扱時間
月，火，木，土曜　10時～20時
水，金曜　13時～20時
日曜・祭日は休み
▶図書室開室時間
日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

「中国登山委員会」とボゴダ山群登山計画

鹿野勝彦

ダワンチン村よりのボゴダ山群遠望／撮影　早乙女緩次

チョモランマ登山のあと、中国での登山を長期的な展望のもとに続けてゆこうという狙いで、天山山脈東部のボゴダ山群の登山許可を、一九八一年から八六年まで五年連続で取得したことは、すでに「山」四二五号（一九八〇年八月）で宮下秀樹氏が報告された。この登山許可はとりあえず日本山岳会学生部名で取得されたが、中国での登山、ないし広い意味での山岳研究に興味と熱意をもつ会員全体のものとしてゆきたい、という前提にたっていることも、そこにのべられている通りである。

この呼びかけに応じて、今後の中国登山研究とボゴダ計画の具体化をすすめるために、有志による第一回の会合が、二月二十七日に行われた。はじめて顔をあわせるメンバーも多かったが、今後の活動方針について、ある程度まで方向が出されたので、ご報告する。

まず、中国での登山や、いわゆるシルクロードをはじめとする内陸地方について、さまざまの面で興味をもっている方は、会員の中にもかなり多いと思われるので、有志を中心とする「中国登山委員会」を設け、会内外の研究者などを招いて研究会を定期的に行うこととしたい。この研究会は、もちろんオープンな性格のものとしてゆくつもりである。

また、ボゴダ山群の登山計画については、委員会内に事務局をおき、第一次隊の派遣をめざして具体的な準備をすすめる。第一次隊

東海支部二十周年記念 日本＝ネパール 国際親善隊派遣報告（下）

五、ガウリサンカール峰登山

われわれがG峰登山の内諾を得た時点では、同峰は未踏であった。しかしわれわれの前、三隊に許可が出ると知った時、初登頂のことが心配だったが現実となってしまった。一九七九年プレに主峰が米国隊に、ポストは南峰が英国隊によって落され正直なところわれわれの気持も一時ぐらついたが、彼等の報告によりG峰の困難性、素晴らしさを再認識し、逆に若い隊員をふるい立たせた。また八〇年プレには豪州隊によりツェリムマ峰も落され、われわれの計画ルートの点と線のうち点はすべて登られてしまった。

八月二十九日より順次BC（四八〇〇㍍）入りした隊員により九月三日BC開きを行なった。行動に際しては市橋、山本の外、伊藤、辻、尾崎、柳沢の計六人をリーダーとして、どのパーティにも一名加わることを原則とした。シェルパは隊員資格のサーダー　サムブー・タマン以下六名。（六名のうちタマ

山をきれいに　ゴミは持ち帰ろう

原稿募集

山に関する原稿を会報編集委員会宛にお送り下さい。原稿の取捨は編集委員会におまかせ頂きますが、原稿用紙（できれば一行を十五字詰にして）七、八枚程度。研究、随想、紀行、報告およびカットも含めフレッシュなものを！

留守番電話（電話番号234―六六五九）

は、第二年度以降の計画をスムースに進めるため、単にピークの登頂をめざすのみでなく、広く山群全体を偵察し、概念を掴むとともに、若干の学術調査も実施する。このため、隊の編成も、さまざまの分野の専門家を含む幅広いものとし、現地での行動も、メンバーの個性を生かした、機動性のあるものとしたい。いうまでもなく、この計画全体は、今後の中国での登山などの活動をより発展させるような機能をもたなければならないだろう。

第一回の会合では、とりあえず以上のような方向が打ち出されましたが、「中国登山委員会」としては、ボゴダ計画に限定せず、幅広い活動を行ってゆきたいと考えておりますので、ご指導、ご支援をお願い申し上げます。個々の会合などについては、別にお知らせいたします。なお、当面、委員会の責任者は神崎忠男、事務局は鹿野勝彦、佐村雄三、磯野剛太らが担当いたします。

藤島さんの本・ほか

小野　幸

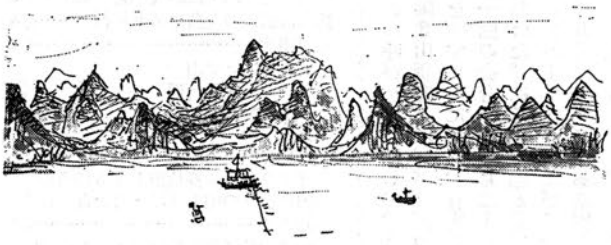
なくなられた藤島敏男さんはよい本を持っておられたので、よくお宅へ参上させていただいた。それは牛込時代から諏訪町時代にかけてであったから、昭和でいえば十八、九年頃からであったろう。フランス文学の江口清君にも藤島さんの本の話をしたら、荷風ものをぜひ、というので伴なったのも、まだ牛込時代であった。その頃は戦争中で本もなかなか手にはいらないので、よくご本を拝借させていただいたものである。

その頃のある日、藤島さんは「山の蔵書の目録をつくって見たから、一部君にあげるよ」とタイプでうったコピーをくださった。それは横文字の本だけであったが九枚のコピーにべったり打ってあった。たぶん、一度に五、六枚もコピーされたのであろう。はじめの方の紙には LITTÉRATURE ALPINE として分類したものもあったが、ほとんどが、身のまわりの本を端からリストしたといった記し方のものであった。

この蔵書のコピーの九枚の内容はフランス語が一二四部、英語が一〇九部、ドイツ語が二部の計二三五部の洋書だけで、和文の本はその時つくられたかどうか知らないが、くださらなかった。さすがフランス語の山の文献はダンゼン多いのにおどろいたものであった。

この間、本の整理をはじめたらはからずもこのコピーが出てきたので、めずらしそうなフランス文献をすこしぬき出して、ごらんにいれようと思う。なお、ドイツ語の二部は S.A.C. の Klubhütten と Hoek の Schnee, Sonne und Schi で、いずれも有名書である。では

Ceresole, A. Légendes des Alpes Vaudoises. 1888.
Ceresole, A. Légendes des Alpes Vaudoises. 1895.
Coolidge. Les Alpes dans la nature. 1913.
Dargaud. Voyages aux Alpes. 1857.
Dumas, A. Impression de Voyage en Suisse. 1893.
Durier. Le Mont-Blanc. 1887.
Javelle, E. Souvenir d'un Alpiniste. 1886.



桂林・灘江を下る／吉阪

東海支部報告

ン族が二人いた、最近はタマンの進出もかなりあるため、彼等を一概にシェルパと呼ぶのはどうかと思う。）

キャラバン出発以来、橋の建設中も雨にたたられ通しで、隊員の健康状態は思わしくなく、全隊員が活動できたのは中盤以降であった。

われわれのルートは豪州隊のルートとなったツェリムマ南西稜と東に延びる主稜線との間の東南壁のほぼ中央部である。BCより東にガレ場を横断し、小リッジを乗り越した所から最高到達点まで全ルートに固定ロープを張った。中央部取付までは雪田、ガレ場、緩い岩場などで問題は無かったが、前半は小雪崩の頻発にしばしば悩まされた。全体に傾斜が急なので大きな雪崩は一度も見られなかった。

中央部のリッジ状になった所をデポとし、これより岩壁、氷壁、雪稜を登り、デポより二十三ピッチ（一ピッチ、五〇㍍）で岩壁帯下の雪壁を削りとってCI（五五五〇㍍）とした（九月六日）。しかしこの時点でわれわれは判断を誤まった。すなわち九月も中旬になれば好天が続くと聞かされていたので、早い前進よりもCIへの荷上げに重点を置き、好天が訪れたら一挙に上部へ前進しようと考えていた。ところがこのロルワーリン渓谷の天候は、予想に反してなかなか良くならなかった。

CIまでは比較的容易であったが、それでも悪条件下では、下降は相当部分懸垂に頼らねばならなかった。CIは天幕地が非常に狭くて五人程の収容能力しかなく、無理に増強した天幕も、降雪中絶え間なく発生するチリ雪崩に潰されてしまい、荷上げには大変なネックとなった。

CIより傾斜は一段と増し、岩壁帯を六ピッチで抜け出て雪稜に出たが、上へ行くほど傾斜も増し、さらに脆い岩場、セラック、巨大な氷柱などに行く手をはばまれ、きわめて登りにくい。二十二ピッチ目に南西稜に出て、それから四ピッチ、最後にハング気味の垂直の雪壁を登りきるとツェリムマの頂上に達した。豪州隊がわれわれの時よりもはるかに雪が多かったとはいえ、ツェリムマ頂上に達するのにキャンプを四つも出したことが登ってみて納得できた。頂上から南峰よりに一ピッチ下ったチベット側の台地をCII（六一〇〇㍍）とした（九月二十四日）。天幕の外へ出るのに固定ロープにつかまらなくても良い唯一の幕営地であった。地図上のツェリムマは六三三三㍍となっているが、高度計ではそれよ

Kurz, L. La Chaine du Mont Blanc. 1892.
Mummery. Les escalades dans les Alpes et le Caucase.
Norton. La Derniere Expedition au Mont Everest. 1924.
Rambert, F. Les Alpes Suisses. 1886～. 5 vols.
Rambert, F. Guide et Souvenir.
Rey, G. Le Mont Cervin. (large edition)
Russel, H. Souvenir d'un Montagnard. 1888. 2 vols.
Saussure. Voyages dans les Alpes. 1779～. 4 vols.
Töpffer. Voyages en Zig-Zag. 1846.
Töpffer. Nouveaux Voyages en Zig-Zag. 1864.
Vallot. Tableau du Massif du Mont-Blanc.
Whymper. L' Escalades dans les Alpes. 1873.

などで、仏文と仏訳ものが目につく。

藤島さんの写真は美しくて、わかりやすい作品が多い。「山に忘れたパイプ」にも三十葉ほどのものが飾られている。昭和七年八月号の「婦人之友」は『いざ来りて暫し憩へ』特集号で松方、浦松、三田各氏の文章の間に藤島さんは「牧場・高原・山頂・山小屋」と題して八葉の写真とそれに対するそれぞれの短文をかかげられている。その中の『蓼科牧場』では、「千曲の谷から蓼科山の裾をめぐって諏訪の方へ越していったのは十一月も末であった。山にはもう幾度か新雪が来て、ふもとの牧場もすっかり枯野原になってゐた。まだらに雪の消え残った枯野に牧場小屋のションボリと建ってゐるのが何故か私の心にもの淋しい感じを与へた」などとつけられている。

ついでであるが、この「婦人之友」は昭和六年八月号も『山を愛す』号で藤島さんは「美ヶ原」という随筆を書かれている。

「かっての夏、私は午後松本の町を出ていった。牧場で泊るつもりをあまりにもよく晴れ渡った夕べだったのでつい王ヶ鼻の方へ登ってゆくと、はげしい夏の日ももう穂高のむかうに落ちて、あの鋸の歯のやうな岩山の真黒なシルエットが金色の西の空にはめこんだやうに描かれていかにも美しい。濃藍の空に銀砂子をまいたやうに星がきらめき始めるともう山から下りるのが惜しくなって、山の上で夜をあかさうと思ひ定めてしまった。岩場のすぐ下の草原にゴロリと身を横たへて夜のとばりにとざされてゆく山の姿をいつまでもあかず眺めてゐた……」

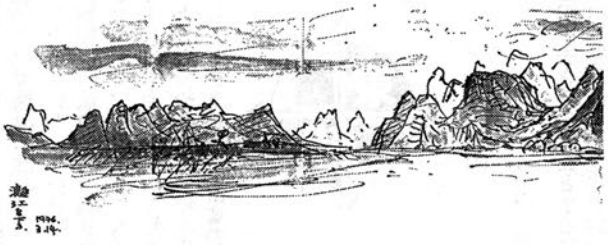
松本時代によく行かれた山のひとつであろう。それから写真で思い出したが、額田敏さんの『山岳写真のうつし方』に藤島さんは「序」をよせられておられることである。「登山に於て、あくまでも山は主であり、写真は従であるが故に、山好きの書いた山岳写真術でなければ、登山者に何の役にも立たない」などと述べられておられるのが、昭和七年という昔のこと、でも額田さんは壮健で歩いておられた。

・・・・

蛇足であるが「山に忘れたパイプ」の中の『西欧山岳文献の翻訳』に、

「まづ古るいところから挙げれば、アルパイン・ジャーナルの前身ともいうべき『峰・峠・氷河』三巻の抄訳がある」

とあるのを見て、なお仏訳本のことを付記しておく。この「抄訳」



桂林・漓江を下る／吉阪

り常に低く、六一〇〇㍍を少し越える程度と思われる。

CⅡより南峰への稜線は両サイドがすっぱり切れ落ち、われわれの想像をはるかに越える悪さだった。まずネパールサイドの稜線を十三ピッチ進み、この稜線で休む気になれる唯一の場所である雪の高みに雪洞を掘り、仮CⅢとした。ここまでは難しいとはいえまだ容易であった。十四ピッチ目からは「地獄のトラバース」と皆が呼んだネパール側あるいはチベット側の氷壁、岩壁の蟹の横這い式のトラバースで、さすがの猛者連もここを通るたびに寿命が縮むとぼやいた。雪洞から十四ピッチでチベット側の大雪庇の下を削ったCⅢ（六一五〇㍍）を建設した（十月十日）。

CⅢよりネパール寄りに四ピッチ稜線を進み、行き詰まってチベット側に空中懸垂し、それより主にチベット側を通って最後にカトマンズからも指摘できる顕著な雪稜の上に出て、十五ピッチ目で南峰直下の垂壁に達し、そこをCⅣ（六四〇〇㍍）予定地とした（十月十八日）。

しかしながら、この頃よりあれほど悪天続きだったロルワーリンも晴れている時間が長くなり出したのは良いが、それとともに冬の強風が吹き始めた。この凄絶を誇る稜線を強風下に行動するのは不可能に近く、仕事や健康の都合で四人のリーダーを含む六人の隊員が下山したことなどが重なり、十月十九日ついに中止のやむなきに至った。

事実十月二十二日CⅡへ荷下げに登った隊員は、二張の天幕と横にデポしておいた装備、食料が跡形もなく消え失せているのを見て驚かされた。

十月二十三日全員無事でベディン村へ下山した。

六、再びカトマンズ

十月下旬、尾上総指揮、湯浅隊長が本遠征の最高顧問の橋本竜太郎氏、団長の高木健太郎氏の両国会議員および名古屋文化学園理事長の加藤重也氏を伴ない再来ネした。そしてネパール政府要人、日本大使等と会談、また予定外であったがタパ総理大臣からも招かれ、今後の日ネ

は Dufour が訳した Les Grimpeurs des Alpes. 1862. なので、三四六ページで、さしえはまったくない。しかるにフランスでは仏文により、一九七二年に独自の「峰・峠・氷河」がローザンヌの Bibliothèque romande 書店より Edmond Pidoux によって出された。書名は Anthologie romande de la littérature Alpestre で、Rousseau や Saussure にはじまって、Töffer, Javelle, Kurz, Gos あたりから Lambert, Vaucher, Fontanet におよんで、二四四ページほどの本である。藤島さんが麻布にうつられてからの書棚は拝見したことがないが、この本もきっと読まれておられたと思う。

松本信広氏の上高地スキー行

慶大名誉教授松本信広氏が三月八日、八十三歳で死去されたことを新聞で知った。東洋史、民族学の権威であることは広く知られているが、氏は慶大山岳部の創期メンバーの一人であり、部報『登高行』第一年、第二年の編集、発行人であった。第一年には「狭山紀行」、「陸貝の研究に就いて」、「高麗山日和田山の伝説」、「山岳語に就いて」、「地形を表はす方言」、「信州島々地方の山岳語」、第二年には「風土記に現れたる山岳伝説」、「牛首岳と赤岩岳」、「南安曇郡の伝説」、第三年には「泰山の研究」などを発表され、後年のその道の片鱗をうかがわせる。

第二年の年報欄には大正八年三月二十三日から四月二日までの第三回関温泉スキー講習会のあと、第四回スキー講習会として

「第三回講習会後松本信広、斎藤茂、大島亮吉および小林達也の四人は上高地スキー旅行を行い成功す」と記されている。これは北アルプスにおける初期のスキー登山の記録からもまことに貴重なもので、くわしくその概要を知ろうと思い昭和五十三年十月、失礼をもかえり見ず手紙で問いあわせたところ十月四日付で次のような御返事をいただいた。

「お手紙拝見、残念ながら小生八月以降慶大信濃町の病院で臥床中であり、貴問に十分そうことが出来ません。『登高行』に出た記文にはまちがいがあり、御採用にならぬようお願いいたします。同行者は私の外に斎藤、大島両君だけです。大島君は当時スキーの初心者でしたが、がんばっておりました。上高地にはスキーのあとあり、私達より前に誰かはいっていることを知りました」

これにより講師小林達也氏は同行しておらず、三人だけで上高地にスキーを乗り入れたことが判明した。（小林氏は当時関山スキークラブの幹事で、スキーの名手として知られていたが、大正十年十月高田で腹膜炎のため死去した）

スキーで上高地入りをしたのは大正六年春横浜の外人ウインクラー氏が最初と思われる。大正七年三月には京都の田中喜左衛門氏一行があり、大正八年四月、松本氏が見たスキーの跡というのは、このシーズン常念越えで槍沢から槍ヶ岳をうかがい上高地へ下った学習院の板倉勝宣氏らのものであろう。

松本氏はこのときのことを『大島亮吉全集』第五巻「大島亮吉君と私」の中で簡単に触れ、登高行第二年をもとにした『登高者』（安川茂雄編）所載の年譜の誤りを指摘されている。それにしてもこのスキー行はもっとこまかく知りたかった、とくやまれる。松本氏のご冥福をお祈りする。（山崎安治）

・雪のゲンコツ山

島田　巽

三田幸夫さんを隊長とするこの山、標高にゼロの数字が一つ足りない。マナスルの約八一六〇㍍に対して八一六㍍しかないので登頂したとて胸を張るわけにはゆかない。しかし、この中伊豆の矢筈山、ちょっと小意気な山容で人目をひく。革新陣営の集会でシュプレヒ・コールをやるときに頭上に突きあげる、あの握りこぶしそっくりなところから、愛称の山名ともなっている。「ゲンコツ山の協力につき長期的展望に立った話合いがもたれた。

十月二十九日、Yホテルで催された送別会には、マガール地方開発庁大臣、同ガウチャン長官、日ネ友好協会々長のパント大蔵大臣、ダルシャン・ルムビニ委員長をはじめ大臣、次官八名、それに日本大使夫妻も出席された。外国人主催のパーティでこれだけの顔振れ、それにネパール人の出席者数が主催者数を上まわっているということは希有なことと観光省の顔見知りの役人が話していた。席上ネパール側から、今回の遠征は親善交流の手本であり、今後もこのような隊が増えることを熱望するといった趣旨のスピーチがあり、次々と本遠征に対する賛辞の言葉を贈られ大いに面目をほどこしたが、登頂に失敗した登山隊員としては穴があったら入りたい気持であった。両議員の出席という点を割り引くとしても、この遠征にわれわれの予想を上まわる反響のあったことは事実だったらしい。それとともにネパールが日本に期待することと大であるという印象も受けた。

席上両議員から心電図および顕微鏡数点がネパールに寄贈され、親善活動の最後を飾った。

七、おわりに

今春五月下旬、名古屋にて今回収集した民具、今回および過去の東海支部員によるネパール遠征記録写真等を中心に「ネパール展」を開催する予定で、同時に二十周年記念総会、祝賀会も併せて行いますので、会員諸氏の御観覧、御出席をお願いします。

画竜点睛を欠いたG峰登山については、既に一部の若い人達によりふたたび計画が進められているが、われわれの最高到達点上の垂壁、数本のクレバスが見られる南峰のプラトー、さらに主峰までの長く厳しい稜線等の未知の部分には困難な個所が多く、気軽には取組めないが、日が経つにつれ登れなかった口惜しさは増している。

最後になりましたが、西堀会長はじめ会員の皆様に有形無形の御援助を賜り、厚く御礼申し上げます。

（文責　中世古隆司）

東海支部報告

たぬきさん」の童謡をお孫さんから聞いている三田さんとしては、ちょっと見のがせぬ山であった。

一昨年の五月、三田さんの慶応時代の山友、小室雅夫、本郷常幸の両君と四人で万二郎岳へ行ったときも、この山の話がでた。昨年末に、それも三田さんの久恋の山であった足柄の矢倉岳に登った時にも「こんどはゲンコツ山だね」と念を押された。（矢倉岳山行は「山」四二八号の織内君の寄稿にくわしい）春のきざしも見えたので声をかけると、あのときの八名全員が賛成、地元に縁のふかい小室君も誘って三月二日、伊豆高原の宿舎に集まった。

その朝の東京は春雪にみまわれたが、暖いはずの中伊豆で、大室山が白扇そのままに光っていたのは意外だった。この伊豆高原には三田さんの令息の慶応時代の山仲間、佐竹鋏一君が常住しているので、いつもお世話になる。今回もゲンコツの指のあたりになる山頂近くが登りにくく、この雪では登路も探しにくいと心配して、地元の池地区の杉山氏に同行を求めてくれた。

翌三日は『快晴の山』の著者のおかげで陽光の中、一〇時に遠笠山道路のゲイト付近から登りにかかった。たちまち一〇数センチもつもる雪道となり、杉山ガイドが先頭に立って枝の雪をはらったり、ナタをふるってくれる。まさか伊豆で「積雪期登山」を楽しもうとは、夢想もしなかったので、三田さんはじめ一同大よろこび。なるほど山頂に近づくと少々厄介

赤岳十句

小林　碧

氷壁に風鳴り熄まず夜の煖炉
早発ちの樏鳴らす星の中
樹氷林早発ちの灯の続きけり
雪壁を攀ぢて夜明の雲に入る
三角標搏つ氷塵の虹あはし
雲触れて逝きし名凍る鎮魂碑
雪稜をゆきし跡あり日にあをき
雪稜の岐れて雲に落ちゆけり
日溜りに日雀声澄む樹氷林
夕凍みに群れて声なき岳鴉

図書紹介

カラコルム探検史 上・下

ヘディン著
水野勉
雁部貞夫 訳

ヘディン探検紀行全集の別巻として発行されたが、題名のとおり、紀行ではなく研究である。原書はヘディンの第三回中央アジア探検（一九〇五～八年）の学術報告書「南チベット」全十二巻（本文九巻、地図二巻、アトラス一巻）のうち、第七巻（History of Exploration in the Karakorum Mountains）である。

内容はカラコルム山脈とその周辺の探検および解明の歴史であって、常識的に考えられるカラコルム探検史ではない。その点では、メイスンの「ヒマラヤ―その探検と登山の歴史」とか、ダイネリの「カラコルム登山史」などとはかなりちがう。旅行者や探検家ばかりでなく、カラコルムには一度も足を踏み入れなかったが、中央アジア、カラコルムの地理の解明に業績のあった学者の研究にもふれている。いかにしてカラコルムの実態が明確になって来たかという歴史が述べられている。したがって、論議が地図中心になるのは当然である。そして、論議はカラコルムのみに限定されず、時として中央アジア全体にふれることもある。

ヘディンは先蹤者たちの足どりや業績を紹介するだけでなく、それらを整理し、検討を加えているのである。そのため、ヘディンは尨大な文献を渉猟し、引用している。

翻訳にあたっての困難は、大きく分けて三つあった。第一は論議を理解すること、第二は尨大な地名、人名の表記をどうするかという問題、第三は引用されている文章の言語の問題であった。

第一は中央アジアの地理を古い地図を見ながら勉強して、なんとか切り抜けた。ヘディンの述べていることが理解できたと思う。第二のカタカナ表記はたいへん悩んだ問題であった。地の文では統一されているけれども、引用文では各筆者が別々の表記をしているし、それらの人々の使う言語がちがっているため、発音も当然ちがっているかもしれない。いちばんひどい例がコーカサスであろう。これは明らかに英語の発音である。最近ではカフカズと現地の発音に近い発音に表記している。しかし、上巻においてのラテン語ではカフカスであろうか。カラコルムでも、ヒマラヤでも、パミールでもたいへんな量の表記があって、どうするか迷った。最終的には凡例のように妥協したが、これでいいとは思っていない。

第三の多くのヨーロッパ諸言語、ラテン語、オランダ語、イタリア語、フランス語、ドイツ語、英語をどう扱うか、はじめは全く悲観的であった。特に、ラテン語を全く学んでいない訳者にとっては、絶望的で誰か適任者にその部分を訳してもらう以外にないと観念したが、前後の事情とか中央アジアの地理に明るくないと意味がわからないので、適当な人がみつからなかった。また、語学を専攻したわけではないので、三〇〇年も前の古い形のオランダ語、イタリア語、ドイツ語、フランス語もはじめてみるものだった。引用

スリナガル湖／吉阪

ではあったが、予定どおり一三時に頂上。

白雪の富士が上半身を中空に浮かせて歓迎してくれる。標石が雪面に頭を出している狭い頂上で、まず三田さんのために乾杯、三田さんと小室さんとは八十一歳なのに平然として食欲も旺盛。若輩（？）たちも鼓舞されたかたちで、自動車道路へ下ったのは一五時二〇分。

三田さんが、お孫さんに登頂報告をどうされたか、そのうち拝聴したいと思っている。

一行は、三田幸夫、小室雅夫（登高会員）河野幾雄、織内信彦、金坂一郎、小原勝郎、小原晴子、太田敬、島田巽。

・ダージリンの一夜

（第二回英国エベレスト登攀隊員の子息との出合い）

前田　浩

ブータン・ヒマラヤ西北部のチョモラリー（七三一五メートル）のトレッキングを終え、バグドグラ空港からカルカッタ経由で帰国する仲間を見送り、カンチェンジュンガを見ようという三人（会員・寺本滉、神戸山岳会員小川集太と私）はタクシーでダージリンに向かった。途中シリグリからおもちゃのような登山列車（S・L）でダージリンに行き、ホテル、オベロイ・マウントエベレストに泊まった。

ダージリン随一というこのホテルの窓からはカンチェンジュンガが一望に見渡せて素晴らしかった。何でも七〇年前の建築とかで古風な石造りの三階建、通された部屋のマントルピースには、石炭が赤々と燃えており私たちを喜ばせてくれた（夜になって石炭の臭気に悩まされ窓を開け放すという一幕もあったが）。

十一月も半ばを過ぎると観光シーズンも終りに近いのか、食堂の暖炉近くのテーブルについた夕食の客は私たち三人の外に、インド人家族七人と白人の男客一人という淋しさで、翌日の夕食も同じ顔ぶれであった。

一人で食事をしている、同席の白人客の話によると、登山博物館にある英国のエベレスト登山隊の古い写真に、彼の父親をペインターと説明してあった。彼の父親はクライミングメンバーで参加している。第一回の二十一年はペインターだったか知らぬが、翌年の二回目はマロリー、ソマーベル、ノートンたちと一緒だった、とのこと。私は手帳に彼と彼の父親の名

図書紹介

箇所が短かければいいのだが、ヘディンは長く引用して傍証を固め、それも多数回にわたるのである。ここではヨーロッパ知識人の教養と日本の知識人の教養の相違をしみじみ感じさせられた。

結局、訳者がそれらの言語を学習してから訳しはじめたわけで、翻訳は長くかかってしまった。しかし、そのおかげでギリシア語、ラテン語、オランダ語と新しい言語が読めるようになったので、たいへんありがたかった。

下巻になると、旅行家などが英国人が多くなるので、その点は問題が少なかったが、ドイツ語とフランス語はかなり残っている。

けれども、よく考えてみるとこれぐらいのヨーロッパ言語が読めなくては、ヨーロッパ人の学問的業績をしらべることはできないし、学者は疑問も持たずにやっていることであろう。当方だけが勉強不足ということだけであろう。

以上、自己宣伝臭くなってしまったが、内容はたいへん興味深いと思う。本文ばかりでなく豊富な注のおもしろさも格別である。ストーリーのおもしろさでなく、論理のおもしろさである。

昭和五十四年十二月（上）および昭和五十五年一月（下）発行　白水社　A5判　各三八〇〇円

（水野勉）

きのうの山きょうの山

上田哲農著

著者上田哲農氏は、昭和四十五年の秋、五十九歳で没している。彼は、本名を上田徹雄といい、画家であると同時に、すぐれた登山家であり、また文才にも非凡なものを持っていた。彼は生前、すでに二冊の画文集（『日翳の山ひなたの山』昭和三十三年・朋文堂、『山とある日』昭和四十二年・三笠書房）を上梓しており、その独創的な画文は多くの読者を魅了した。

著者没後十年にして今回出版された本書は、著者が生前に雑誌等に寄稿したものやその遺稿を精選して一冊にまとめたものであり、内容は挿画を多く含んだ山の随筆集である。このなかには、さきに安川茂雄氏が編集した『上田哲農の山』（昭和四十九年・山と渓谷社）からの一部再録もあるが、他は一冊の単行本としてまとめられるのは今回が初めてのものである。造本が四六判であるため、著者生前の前記二著ほどの豪華さはないが、各編とも内容のユニークさと、その味わいのふかさに変りはない。

彼の画文の特徴は、簡潔で太いタッチの画とともに、散文詩的なその美しい文章と、個性豊かな紀行文や物語り風のエッセイにあるといってよい。その画文からは、どこからか雪崩の遠鳴りが伝わってくるような、また針葉樹の脂の香りがふっと漂ってくるようなものを覚える。これほど山の雰囲気を正確に、しかも詩的に伝えてくれる作者は少ない。これは、彼が繊細な観察眼と、豊かな感受性を併せもつ画家であったことに加えて、すぐれた登山家（日本登高会創立会員・第二次RCC代表）であったことから、自然ににじみ出たものであろう。

本書の内容のうち、「山道具によせて」は、山道具十二題ともいえるもので、著者が山道具との出会いやその愛用ぶりを通して山を語ったものであり、著者の個性が色濃く出ていて飽きない。また「峠の二人」の一編は、峠を舞台とした大島亮吉氏の文章が絵のようであるとするなら、これは映画のシーンを観ているような美しいエッセイである。また性質は異なるが、「古い会報より」、「小野崎良三氏―一般山岳団体の父―」、「山を通じて妻（夫）を語る」の各編は、著者の登山家としての一面をよく伝えてくれる価値ある読物である。

巻末に、著者に傾倒した山岳写真家白籏史朗氏が、「上田哲

前を書いてもらった。H.T. Morshead が父で彼はその息子の I. T. Morshead で、一九二二年生れの五十八歳。ちょうど父親が第二回遠征に参加した年に生れたのだった。ダージリンの生家を訪ねてみたがまだ残っていた、というような話であった。翌朝食事をすますと、彼はカリンポンに行くといって発っていった。

帰国後、神戸登山研修所の藤木九三文庫で一九二一年の英国偵察隊の報告書と、翌二十二年の攻撃隊の報告書を見ると、彼の父は、英国陸軍少佐で測量の専門家。インド北部の測量に従事していたらしく、同僚のウイラー（のち測量局長官となった、オリバー・ウイラー卿）とともに、ハワード・バリー大佐を長とする偵察隊に参加して、マロリー、バロックの三人で、東ロンブック氷河からの登路を発見しラクパ・ラに登っている。

一九二二年の二回目には登攀メンバーとして参加しており、マロリー、ソマーベル、ノートンとともに、ノース・コルの第四キャンプから更に上部の二五、〇〇〇フィートまで登っていて、四人の写真まで掲載されていることが判った。ペインターといったのは私たちの聞き誤りであったかも知れないが、クライミングメンバーから外されていたように思った彼の気持が判るような気がする。偶然、全く珍らしい人に出会ったものである。

なお、この機会に見た一九二一年の偵察隊の報告書に、チョモラリー南面の写真が載っており、英国の遠征隊は、ダージリンから私たちがこのたび歩いたパロ・チュウのすぐ西の谷（チュンゼイ・バレー）を通ってチベットへ入っており、二つの谷を分けている尾根がブータンとチベットの国境になっていることが判った。私たちはこの国境のすぐ東の谷と、さらに東の尾根を歩いたことも判った次第だ。

・三水会だより

(1)只見川に紅葉と味覚を探る

十月十日二時過ぎ只見ユースホステル着、夕食までの時間、近くの芝倉岳へ散歩。カラマツジコウボウ、スギヒラタケ、ブナハリタケ、ツユタケを採集する。

十一日、明け方の強い雨は出発時に濃い霧となる。車で叶津登山口へ。十時五分それまでの樹林の下が嘘のようにポンとお花畑にとび出す。空はすっかり晴れあがる。開放的な気持のよい草原を直登する道は廃道になっており、指導標に誘われるまま草原の右端から潅木帯に上がる。十時五十分頂上着。一時間の休憩で昼食を終え只見沢登山口へ向かう。急な下りだが前方に鬼ヶ面山の勇姿を飾る

農先生を偲ぶ」の一文を寄せて本書を締めくくっている。著者上田哲農氏を追慕する者にとっては、ぜひ追加しておきたい一書である。

四六判・二一四ページ・昭和五十五年九月十日中央公論社発行・定価一二〇〇円

（松家　晋）

続　静かなる山

川崎精雄　望月達夫
山田哲郎　中西　章
横山厚夫　共著

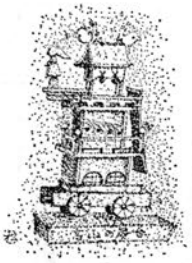
『静かなる山』がでてから二年あまりで、その双生児がでた。掌にとって驚いた。執筆者・変型判・装釘・九十七座数が前編と合同である。まえがきで川崎さんが、「二冊の本は一体であり、……続編を出すからといって、改まって触れることは何もない」と言いきっておられる。

『静かなる山』については織内さんの書評がある（『山』三九八号）。これはそのまま『続静かなる山』にあてらてよい。要点はつくしておられる。

新刊をひらくと、まず藤井画伯の奥秩父将監小屋の水彩画に魅せられた。つづく写真は八葉で、執筆者が撮ったもの。静かなる山のたたずまいに見参できた。

さて内容であるが、青崩峠や杖植峠なども加えた九十七座で、前編よりも広い範囲で、山形・秋田・岩手の三県の山も編入された。前編になかった北アルプスからは、唐沢岳のみ静かなる孤高の山として加えられた。薬師岳とあるのでこれも加えたかと思ったら、早池峰と向いあう山だった。

峠をいれるとその数だけ山頂が減るから、編集にあたって苦心されたことだろう。しかしわたしはすくないが峠が加えられてよかったと思った。「玉原越」では執筆者の永い山行歴が偲ばれるし、青崩峠」では昨年末に川崎・望月・中山（啓）さんらに同行して、愛宕山から展望したこの峠を思いだし、これらの峠は新刊の味をたかめていると感じた。



それにしても前編と同様、よくもまあ性こりもなく静かな山をえらびだし、登ってやむことのない人たちだと思う。祝瓶山は望月さんとともにわたしもいい山だと展望したが、登っていない。稲包山は、知人の葬儀に列席すべく車で三国峠をこした中西さんの目にとまり、いずれあの頂上へと心が動いた山だという。笠取山にしても、雁峠から山頂まで登る人はあるが、さらに山稜を東行して藪にもめげぬ人は少ないだろう。初冬にこの尾根を辿れば、滝川谷ごしに北に両神山がみえる。横山さんの言うとおり、奥秩父の味はこんなところにまだ残っている。

とにもかくにも、静かなる山を求めて登りたいという態度が、それにふさわしい山に出会うわけで、それが新刊の九十七座であろう。大島亮吉先輩が、地図を眺めてさまよった西上州の山行は、大島さんに「払暁的な新しさと望みをあたえてくれた」という。このような心の系譜は、無言のうちに『続静かなる山』執筆の五名の岳人に、脈打っているように思われてならない。自然と人生であろう。

まえがきどおり、国土はいま破壊の一途を辿っている。しかし狭い国土にも探せば静けき山があると、本書は立証してくれる。静かなる山の列伝が『続々』と刊行されますように。

昭和五十五年　茗渓堂刊　変型判二〇五頁　写真八葉　定価一八〇〇円

（柿原謙一）

図書紹介

紅葉に目を楽しませつつ時間をかけて下る。一時二十分剣ヶ峰通過。熊合せ、手合場、熊のつめ跡など昔の狩猟の名残りを留める地名を過ぎながら潅木帯から樹林帯へ。三時十分登山口着。

（荒野康子）

(2)飛竜山に登る

三水会では去る十一月十五、十六の両日、三条の湯を足場に、飛竜山山行を実施した。

三条の湯は昔手負いの鹿を追って行った猟師が発見したといわれる冷泉である。青岩谷出合まで後山林道が通じてからは車で訪れる人も多く、当夜はほぼ満員の盛況であった。小屋主の木下孟一氏が去る六月に物故され、追悼の意味で献杯を行なう。

飛竜山へは北天林道をとる。この道は東京都の水源林巡視道のため、手入れがよくされており歩きやすい。北天のタルに着く頃にはようやく日差しが強くなってきた。タルはタルミ、ダルミ、タワ、ダワと同じく、たるんだところ、たわんだところという意味で、鞍部のことである。奥秩父にはこの名称が多い。

飛竜山へは飛竜権現の祠から二十分あまり登る。縦走路から離れているのに訪れる人も多いのか道はよく踏まれていた。ただ山頂は柵の樹林にさえぎられ眺望は得られない。

飛竜権現に戻り前飛竜から丹波へのコースをとる。歩く人が少ないのか北天林道より荒れていたが落葉を踏み分けての下降は、しみじみと秋の深みを感じさせずにはおかない。

火打石山から眺めた飛竜山の威容に驚かされる。ちなみに戦前のわが国、制式空母飛竜の名はこの山名に由来したものである。

サオラ峠（棹浦峠）から丹波部落の屋根を見下しながらの下りは思ったより長く感じた。

しかしながらおだやかな天候に恵まれ、静かな晩秋の山行であった。

〔参加者〕坂倉登喜子、進藤波男、鳥居　亮、錦織保清、小林　碧、岩堀瑞子、高田真哉、他六名。

（高田真哉）

(3)高尾山忘年家族ハイク

十二月七日、初冬の穏やかな晴天の一日、久し振りに高尾山を訪れました。八日は前日の名残りも消えぬまま、真白に輝く富士山に感激しながら、枯草を踏む足音も軽く城山へ。味噌汁、コーヒーと温い飲みもので昼食。今井、片岡先生の小唄を聞いて楽しいひとときを過ごしました。

参加者　今井（喜）、大野夫妻、荒野、岩堀、片岡、久保夫妻、隈部斎藤（健）、砂田、関塚、高田、鳥居、原、山崎、子供六人、他一名。

（小林由美子）

お知らせ

第四〇六回現地小集会
山菜山行

日時　六月十二日（金）～十四日（日）

集会委員会では、恒例の山菜山行を**福島県の熱塩温泉**（泊）へデラックスバスを利用して行います。山菜を味わい、猫魔ヶ嶽周辺の散策を楽しみませんか。

会費　会員　一九〇〇〇円
会員外二一〇〇〇円

「にしんの山椒漬」「蕗のとうの酢のもの」「うどのあえもの」のような山菜料理で、地元の〝純米酒　笹正宗〟を用意する予定です。

山菜山行写真交換会は六月二十二日（月）ルームにて六時三十分より行ないます。

出羽三山行

科学研究委員会

◇講演会

日時　昭和56年6月23日（火）18時30分～20時

場所　日本山岳会ルーム

講師　慶応義塾大学宮家準教授

演題　「山をめぐる宗教と伝承」

◇出羽三山に高山植物と修験道を訪ねる旅

日時　昭和56年7月11～12日

行動　7月11日（土）朝鶴岡駅集合。羽黒山探索および講演と映画の会。夜羽黒山神社斉館にて懇親会（精進料理）宿泊。

7月12日（日）月山ならびに湯殿山登山と大日坊即身仏参詣。

講師　戸川安章県文化財審議委結城嘉美元山形博物館長

後援　JAC山形支部

秋田・湯瀬温泉より／吉阪

第19回木暮理太郎翁
碑前懇親会
開催について

日時　五月十六日～十七日
場所　山梨県北巨摩郡須玉町金山、有井館
（TEL　0552-51-3175）
交通　中央線　韮崎駅下車
ラジウム温泉行バス終点下車、徒歩一時間半、タクシーの便あり
集合　五月十六日、十六時までに集合
十六時より碑前祭
十八時より懇親会
十七日流れ解散、希望者は茅ヶ岳山行。
麓に深田文学碑建立すみ
会費　六千五百円。宿泊、懇親会費、記念品代共
申込　五月十日、ルーム事務局まで
現地責任者
山村正光（TEL　055 2-51-3175）
甲府市武田　三-六-二七

委員会報告

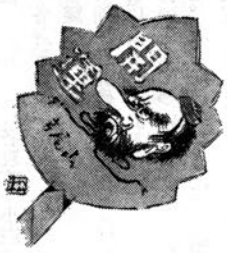
裏磐梯スキー懇親会

科学研究委員会

1月24日（土）、25日（日）の両日、科学研究委員会の懇親会が裏磐梯国民休暇村にて行われ、16名の参加者を得て盛会であった。

24日の早朝、猪苗代駅にてマイクロバスの出迎えを受け、休暇村ロッジに入る。それぞれ自室で仮眠の後、山スキー、ゲレンデスキー、ラングラウフ等のグループに分かれ、裏磐梯でのスキーを楽しんだ。有志7名の山スキー組は、裏

費用 約一万円（宿泊費、バス代、保険料等）
参加定員 四十名
申込方法 日本山岳会事務室気付科学研究委員会宛必ず往復ハガキで申込むこと
（注）例年申込定員をオーバーするので、今回は原則として会員優先とする。先着四十名に対し（諾）の返信を出しますから、受取った方は直ちに予約金二千円を払い込んで下さい。
申込締切 6月10日必着。



ヒマラヤの王国―ネパール展

――日・ネ国際親善隊の記録――

主催 日本山岳会東海支部
後援 愛知県、名古屋市、朝日新聞、名古屋テレビ他
期間 昭和五十六年五月十五日～十八日 十時～十九時
場所 名古屋駅前「名鉄百貨店催事場」
入場無料
概要 一九八〇年秋のネパール ヒマラヤ ガウリサンカール峰登山の記録。架橋や教育援助など親善活動の記録。ネパールの民芸品の展示。ヒマラヤ何んでも相談コーナーの開設。ヒマラヤに関する本の即売。期間中、アンケートによる記念品の贈呈（ネパールの土で焼いた茶ワンなどもある）。
問合せ先 〒460 名古屋市中区橘1-27-8 尾上機械内 日本山岳会東海支部（電）〇五二―三二一―一五〇一（係）尾上昇

上高地山研は5月2日（土）から

上高地山研は料金を据えおいて、5月2日（土）から開所の予定です。今年も大いにご利用下さい。くわしくは山研委員会へお問い合せ下さい。

＊ ＊ ＊

Tシャツ 会員への実費配布について

若い会員からの要望があり、デザイン二種を一組として、価二千五百円で頒布しています。お早くお申し越し下さい。

事務局

お知らせ

磐梯スキー場より、中ノ湯―丸山―ゴールドライン―桧原湖のツアーに出かけ、人影の絶えた静寂の中に、山スキーを大いに楽しむ。特に印象に残ったものは、雪の中に湧き出る中ノ湯。桧原湖の氷上スキー横断。そして裏磐梯特有と思われる小起伏に富んだ複雑な火山性地形。それが織りなす冬景色。

夕刻帰舎。夕食時の懇親会は、磐梯鍋などのたくさんの御馳走とラングラウフの映画で、楽しいひと時となった。

翌25日の午前中は桧原湖にてワカサギ釣り。地元のベテランに御指導頂くが、初めてのわれわれにはなかなか難しい。それでも昼食には、釣り上げたワカサギを天ぷらにして頂き、舌づつみを打つ。午後はラングラウフを全員で楽しむ。休暇村にはコースが設けられており、距離競技用のスキーも貸して頂ける。とても素晴らしい環境の中で、歩くスキーの足どりも軽い。

以上のように、登るスキー、滑るスキー、歩くスキー、走るスキー、そしてたまには転ぶスキーと種々のスキーを楽しんだ後、お世話になった国民休暇村の方々に別れを告げ、帰途につく。短いながらも充実した、楽しいスキー懇親会であった。

（参加者）
梅野淑子、神谷光昭、木村義雄、小西奎二、小林 碧、関塚貞亨、関塚洋子、ハロルド・ソロモン、高遠 宏、高橋 詢、中村あや、中村純二、福井正吉、福井夫人、アラン・ロシェ、渡辺正臣。

（神谷光昭）

イノ・シカ・チョウの会

青年懇談会

さる2月7、8日丹沢寄沢において、青年懇談会主催、恒例の「猪鹿蝶の会」が行われた。

丹沢の最もポピュラーな水無川近辺では、猪とか鹿などのような大型獣にはメッタにお目にかかれない。が、丹沢も人気のあるコースを少しはずすと、突然鹿などに出くわし、ビックリすることもしばしばある。

さて、本会は、間違っても花札の会ではない。名称の由来は、猪鍋を囲み、鹿のサシミとか、ステーキを肴に、大いに丹沢を楽しもうという趣旨から起こったものである。蝶とは、おいしいものに集まってくる人間（特に女性）を表わしているとかいないとか……。

2月7日夜、こうした趣旨で、9名が寄小屋に集合し、主の大館三郎さんの手料理に舌つづみを打った。昨年11月行われた山いも掘り大会の収穫物である自然薯も登場し、野生味豊かな食膳に話しが弾んだ。豪傑話も飛び出してきた。このテの話しは、それらの料理と実に相性が良い。ヒマラヤのことも大いに話題となった。

小キジを打ちに外に出ると、満天の星。遠くにいる仲間もこの星を見ているだろうか、などと思いつつ囲炉裏の脇で高いびき。それぞれ、おもいおもいの格好で眠りについた。

8日。山ヤの悲しい習性というべきか。徹底したソフト指向の夜が明けると、毎度のことながら、一変して、ハード指向になってしまう。寄沢の中で最も難しいといわれている滝郷沢左俣に、女性も混じえた全員で登ることになった。寄沢は、丹沢の中でも南に位置するため、比較的暖かく、雪はほとんど無かった。氷も上部枝沢に少々見られる程度であった。暖かいために、氷が解け、両岸の上部岩盤には注意を払うことになった。2、3度下流の方で落石音を聞いたが、幸い、落石に遇うこともなく、快適な沢登りを楽しむことができた。最後の詰めでは、イバラの薮こぎを強いられ、閉口はしたが……。

尾根からの展望は素晴らしく、相模湾の大きな曲線を眼下に見おろしながら、冬の陽とはいっても春を予感させる暖かい日射しの中、尾根を下った。

参加者（順不同）高橋聡、大倉昌身、西村政晃、今村千秋、絹川祥夫、三沢幸夫、勝山康雄、和田、牧野あづさ、以上9名。

（三沢幸夫）

会務報告

2月理事会

2月16日午後6時30分　本会ルーム

出席者　西堀会長、折井、渡辺副会長、中川、中島、中村、川上、越田、鈴木、小倉、岡沢、山口、高本、高橋各理事、大塚、山崎評議員、小原（勝）、鳴原各監事。

委任　大森、飯野各理事、小原（晴）村木各評議員。

◎審議事項

▽次期評議員候補者推薦の件（定款第15条1項に依る）

推薦の基準について意見が交わされた。次回3月理事会にて候補者を確定すること　（諒承）

▽昭和56年度予算案について。

4月以降に再び郵便料金の大幅値上げにともなう、物価上昇の気配を勘案して抑制型の予算とならざるを得ない。このためほぼ前年度並とする。原案につき若干の修正にて　（諒承）

（収入の部）

山日記印税（40万→56万円）

その他の印税（15万→0円）（復刻版会報）

（支出の部）

什器、備品費（0→25万円）（フィルム、ビデオテープ収納ケース）

山日記出版費（34万→39万円）

▽昭和56年度事業計画

原案を若干修正にて（諒承）

▽フィルム委員会（仮称）設置。

（諒承）

目的は映画フィルム、およびビデオテープ・ライブラリーの充実、管理。なお山名研究委員会（仮称）については近藤評議員を中心に検討中。

▽日、韓交流登山計画。

本会（青年懇談会）、韓国山岳会（オルム会）を窓口として、相互に両国の登山を行う（諒承）

（時期　日本にて5月末　韓国にて10月を予定）

◎報告事項

▽次期、理事および監事候補者の推薦については（定款第14条および細則第7、8条により）評議員会にて理事会の意向も勘案して検討中。

▽婦人懇談会　7月に印度女性2名が来日し国内の山行をする。それにともない印度のトレッキング説明会を行う予定。その他各委員会から行事についての報告があった。

3月理事会

3月9日午後6時30分　本会ルーム

出席者　折井、渡辺両副会長、中川、中村、岡沢、菅沢、山口、高本各理事、鳴原監事、山崎、村木各常任評議員。

委任　西堀会長、小倉、高橋、大森、川上、越田各理事、小原監事大塚、小原各常任評議員。

◎審議事項

▽通常会員総会日程の件

五月十五日（金）午後6時　私学会館にて（予定）　承認

▽昭和56年度事業計画および収支予算案　承認

（2月理事会にて修正の案）

▽次期評議員候補者推薦の件

次回4月理事会にて最終決定すること　承認

▽日中文化交流協会より寄付依頼の件

25周年記念事業のため募金　2口（二万円也）寄付　承認

▽製品安全協会より「山岳75年」一九八〇年度、記事転載許可願いの件

記事「アイゼン破損について」北大山岳部　転載　承認

◎報告事項

（集会）　野沢温泉スキー合宿。2月27日～3月1日、参加者30名にて行った。

オリエンテーション、3月28日午後2時、ルームにて開催。新入会員多数の参加を呼びかけた。

ニュージーランド山岳会員歓迎会。3月28日午後6時ルームにて開催する。

小西政継会員の話「カンチェンジュンガ遠征」3月24日、午後6時30分、ルーム。

（科学研究）「スキーの科学と思い出」西堀会長、3月17日午後6時30分、ルーム。他

（図書）　「第12回山岳図書を語る夕べ」イタリアの山の本。牧野文子会員、3月10日、午後6時30分、ルーム。

「第4回山岳史懇談会」わが大正期の積雪期登山、三田名誉会員、3月30日、午後6時30分、ルーム

戸穂奥社への参道／吉阪

（指導）　第26回山スキー技術講習会。飯豊連峰（二王子岳）3月20日～22日越後支部と共催にて。

（婦人）　第31回セミナー開催、3月14日、ルーム。

印度婦人登山者2名来日予定（5月中旬～7月）

（学生）　天山山脈「ポゴダ」登山について5ヵ年の許可を取付けているので、中国登山研究グループを作って、具体的に推進準備中。

（自然保護）　「日高を守る会」の日高縦断道路反対運動に予算の中から2万円寄付することにした

（其他）　「チョモランマ登山報告書」講談社が引受け、出版計画中。

（本理事会議事録署名者　岡沢、高本両理事とする）

評議員会

3月13日、午後6時30分　本会ルーム

出席者　田口二郎、山崎安治、織内信彦、望月達夫、河野幾雄、大塚博美、山本朋三郎、水野政博、佐藤テル、近藤信行、村木潤次郎西堀会長、折井、渡辺副会長。

委任　木下是雄、野口秋人、高遠宏、朝比奈英三、太田敬、小原晴子。（陪席）中川常務理事。

▽**望月評議員が議長**に選出されて議事を進行。

▽**議案**

㈠昭和56年度事業計画（案）承認

㈡昭和56年度収支予算（案）承認

㈢次期会長、副会長他理事候補者推薦の件

候補者（会長）佐々保雄、（副会長）田口二郎、（理事）神崎忠男、田村俊介、西村政晃、松家晋、伊丹紹泰、河村憲二、鈴木雄二、赤松功也、水野勉、大倉昌身各氏と渡辺

図書受入報告

図書委員会

昭和 56 年 1 月受入図書（つづき）

10 青山学院大学体育会山岳部OB会編「山べにむかいて—昭和53 年度春山合宿遭難報告書」 1980（編者寄贈）
11 国沢鎮雄／矢田部裕編「1979 キナバル<4101 m>高知県キナバル登山隊 1979（平野勲氏寄贈）
12 Rick Ridgeway "The Last Step" The Mountaineers 1980（購入）
13 V. Gippenreiter "The Heights Ahead", Plancta, Moskva 1978

昭和 56 年 2 月受入図書

1 H.C.ペラン著/福田宏年・前島郁雄訳「ペランのパノラマ」実業之日本社 1980（版元寄贈）
2 姫路岳友同人会編「北但の山と雪彦岩峰群」中央出版社 1980（酒井文男氏寄贈）
3 瓜生卓造著「桜の潮」東京新聞出版局 1980（版元寄贈）
4 川崎・望月・山田・中西・横山共著「続静かなる山」茗渓堂 1980（望月達夫氏寄贈）
5 中国登山協会監修「中国の高峰」中国人民本育出版社・東京新聞出版局1981（版元寄贈）
6 杉山康之助著「御意見無用」杉山康之助遺稿集編集委員会 1980（版元寄贈）
7 北海道工業高等学校編「豊山会誌 1980」（編者寄贈）
8 佐藤康著「鳥海山日記」秋田書房1981（版元寄贈）
9 伊藤弥十郎著「アッシュの杖」日本山岳会福島支部 1980（版元寄贈）
10 平沢実写真「写真集・頂」1980（平沢実氏寄贈）

副会長他一期満了の理事（飯野、中島、山口理事を除く）を重ねて候補者として推薦する。（承認）

(四)次期監事候補者推薦の件
太田 敬氏、なお鴨原監事は重ねて推薦する。（承認）

▽報告
通常会員総会は五月十五日(金)午後六時より、私学会館（市ケ谷）にて開催する。

ルーム日誌

（56年2月）

2日(月) 書評委員会
4日(水) 婦人懇談会
5日(木) 評議員会
9日(月) 図書委員会
10日(火) 婦人懇談会
12日(木) 明治大学山岳部総会
16日(月) 理事会
17日(火) 自然保護委員会
18日(水) 三水会
21日(土) 婦人懇談会セミナー 科学委員会
26日(木) 婦人懇談会 会報編集委員会
28日(土) 中国登山研究会 今月の来室者346名

会員移動（2月）

夫婦会員へ姓変更
八〇四八 池田 智津子→三上へ

訂正

二月号掲載の永年会員に一二三一 堀田弥一氏を加えて下さい

あとがき 明大エベレスト登山隊の交野武一名誉会員はエベレスト街道をBC（五三五〇メートル）まで歩き通されたとか。次期会長を予定されている佐々保雄名誉会員も昨年メラ峰（五二四〇メートル）に登頂されてますが、ご両名とも73歳で無酸素。日本山岳会の層の厚さをまたまた感じさせられた次第（O）

昭和五十六年四月二十日発行
102 東京都千代田区四番町五—四 サンビュウハイツ四番町
発行所 社団法人 日本山岳会
発行者 西堀栄三郎
編集代表 岡沢祐吉
電話東京（261）四四二三
振替口座東京三—四八二九番
東京都港区赤坂一丁目三番六号
印刷所 株式会社 技報堂

～81・≪7/31（金）～8/14（金）15 日間≫
ソ連・カフカスの山旅
⊙エルブルース山（5,633 m）登頂（希望者）
⊙夏山アルペンスキー
⊙氷河と花の小旅行，その他多彩！
※カフカスはレールモントフなどロシア文学の郷里です。
案内書呈 (株) 日ソ旅行社 政府登録一般第 98 号
☎ 404—1751(代) 担当：石元広昭 | 〒151 東京都渋谷区千駄ケ谷 1-20-1 パークアベニュービル。